

鎌倉時代のくらし—京内と郊外—

(公財)京都市埋蔵文化財研究所 内田 好昭

はじめに

承久の乱、元寇など鎌倉時代には様々な事件がありました。しかし、遺跡の発掘調査でわかることの多くは、当時の人びとの日々の暮らしに関することです。本日は、出土した遺跡や遺物を手がかりに、鎌倉時代の京都とその周辺にくらした人びとの日常生活の一端を探ってみたいと思います。

1. 京と郊外の空間

鎌倉時代の平安京は、西半の右京が廃れて田畑になっており、東半の左京だけが都市の繁栄を維持していました。その一方で、都市域は、北は一条通を越えて現在の今出川通のほうまで、東は二条通より北では東京極である寺町通を越えて現在の河原町通の付近まで広がっていました。当初とは都市の形がずいぶん変わってしまっています。このエリアを「京」と呼ぶことにします。それから、鴨川の東側の岡崎のあたりは、11世紀頃から六勝寺や上皇の御所が建てられ都市化を遂げています。このエリアは「京」とは区別して「白河」と呼ばれていました。京・白河の周囲には田畑が広がり、農村が点在していました。



2. 掘立柱建物と礎石建物

まず、鎌倉時代の人たちがくらしした住宅について述べましょう。当時の建物には、柱の立て方が異なる2種類の建物がありました。掘立柱建物と礎石建物です。掘立柱建物は地面に丸い穴を掘り、そのなかに柱を埋め込むことで柱を立てて上屋をつくる建物です。礎石建物は、地面の上に平らな石を置き、その上に柱を置いて上屋をつくる建物です。掘立柱建物は柱の一本一本が電柱のように自立しているので、少々構造的に問題があっても上屋を組み立ててゆくことができます。その家に住む人が自分でつくる建築、村や町の建築が上手な人たちによってつくられた建築はすべて掘立柱建物だと考えられます。これに対して、礎石建物は礎石の上に建物が乗っているだけなので、上屋の構造がしっかりと全体を支えていなければ倒れてしまいます。礎石建物は考え抜かれた設計図に基づいて専門の大工が建てた建物に違いありません。掘立柱は柱を地面に埋めるので、柱が腐りやすく、絶えずメンテナンスが必要ですし、それでも長持ちしないので頻繁に建て替えられます。礎石建物は柱が腐りにくいので長持ちします。平安時代の初め頃までは住宅はすべて掘立柱建物で、礎石建物は寺院や朝廷の役所にだけ用いられていました。やがて高級貴族の住宅の主要建物が礎石建物になってゆきます。鎌倉時代にあっても、礎石建物は貴族層や高級武家層の屋敷の中心的な建物に限られます。平民の住居はすべて掘立柱建物と考えてよいでしょう。

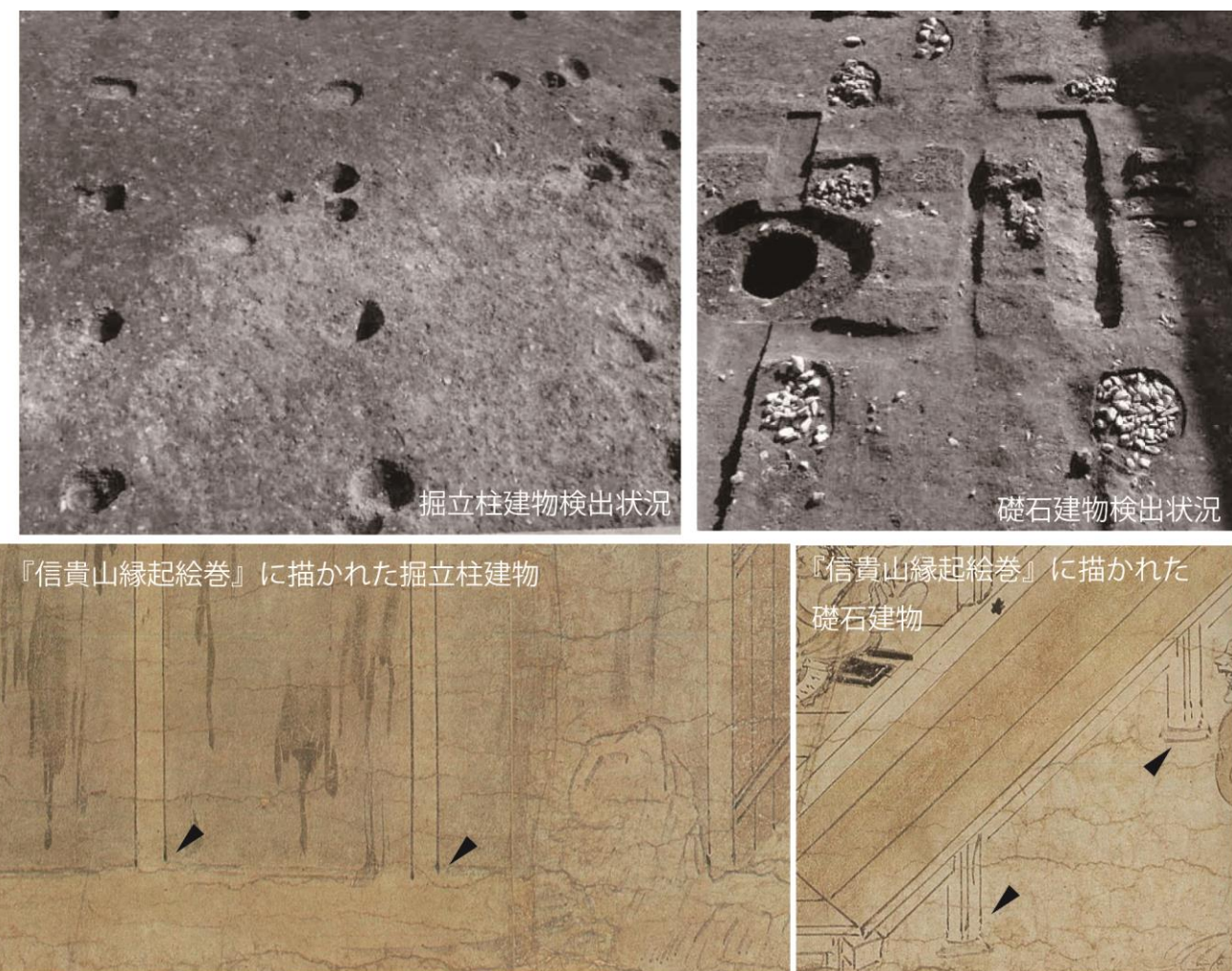


図2 掘立柱建物と礎石建物

3. 一般的な住宅

掘立柱建物にしても、礎石建物にしても、遺跡として地中に残るのはそれぞれ柱穴か礎石でありまして、つまり柱のあった場所がわかるだけなのです。しかし、柱の位置がわかるので、建物の平面的な大きさがわかりますし、上屋の構造もある程度推測できるのです。

鎌倉時代の京・白河とその周囲には「一般的な住宅」と呼べるような類型がありました。建物の多くは平面形が長方形ですが、短い方の辺を梁間、長い方の辺を桁行といいます。鎌倉時代の一般的な住宅は梁間が6～7mで、柱が4本で柱間が3間です。多くがこの大きさです。桁行はばらつきがありますがおおむね8～12m、柱6本で柱間5間～柱7本で柱間6間程度に収まります。面積は50～70㎡程度となります。「総柱建物」といって建物内部に基盤目状に柱を有する形式です。床を支える束と上屋を支える柱との区別がつきにくいので、内部構造はわかりませんが、土間+床構造であったと思われます。このタイプの建物は、京内にも郊外農村にも普遍的に見られるので、平民～武士層が一般的に共有した住宅の形式であったでしょう。この「一般的な住宅」にはすぐ近くに井戸1基が付属することが多いです。

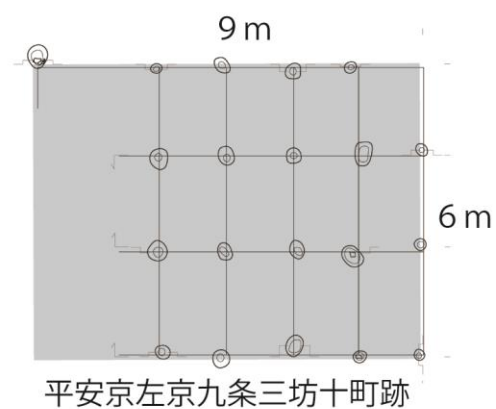
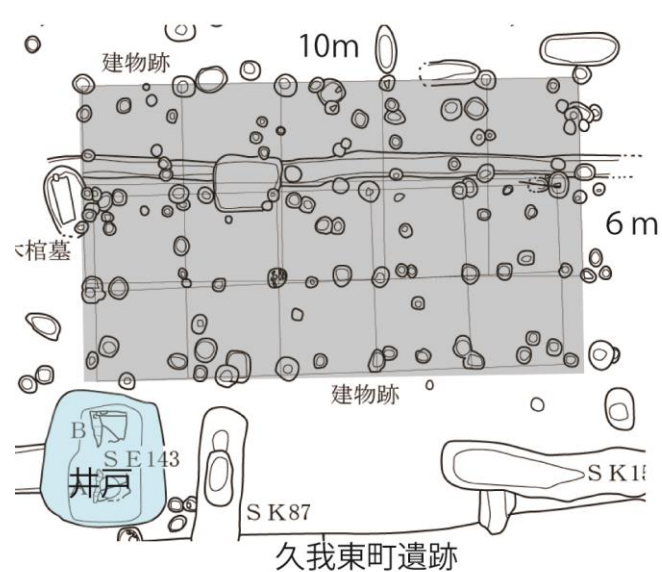


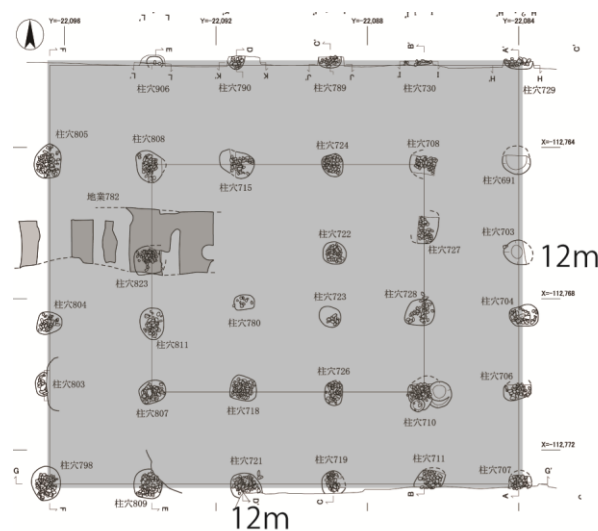
図3 鎌倉時代の一般的な住宅

4. 大きな住宅と小さな住宅

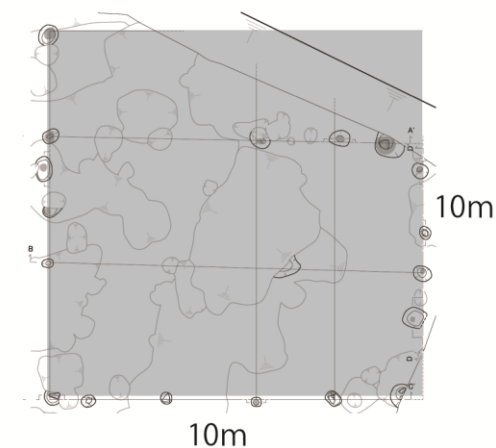
「一般的な住宅」が一般的であったとしても、鎌倉時代には財力に応じた様々な階層があったことは疑いようがありません。このような階層差は住宅のかたちにどのように表現されたでしょうか。

まず、「一般的な住宅」より大きな建物は、より財力を持った上流階層の住宅であった可能性があります。京内では左京九条三坊で一辺12mある礎石建物が見つっています。仏堂と見る説もありますが、貴族の住宅の可能性もあります。伏見区の富ノ森城跡では、一辺10mの住宅が見つっています。他の住宅より一回り大きく、在地の名主層の家ではないでしょうか。これらは面積が100㎡を超えるものです。

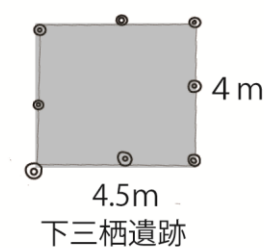
一方、京内、郊外を問わず、大変小さな住宅も見つっています。伏見区の下三栖遺跡では、一辺4mほどの建物が見つっています。総柱型ではないので土間造りの建物でありましょう。これと同規模の建物が他に2棟並んでいますので、大きい屋敷地の付属建物ではなく、単独の住宅だと思われます。牛馬を持たず場合によっては農具すら持たない階層の住民で、「一般的な住宅」の居住者より下層の人たちであったでしょう。同様の大きさの住宅は、京内でも数多く見つっています。多くは道路に面して間口を開き、奥に長い形式の町家型の住宅と思われます。町家型の建物は、平安時代から続く土間造りの建物も多いですが、鎌倉時代には総柱型の町家型建物も出現しますので、このころには片側が土間で片側に床を持つ町家が存在した可能性があります。



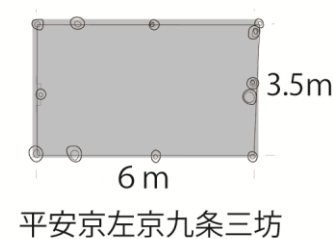
平安京左京九条三坊（礎石建物）



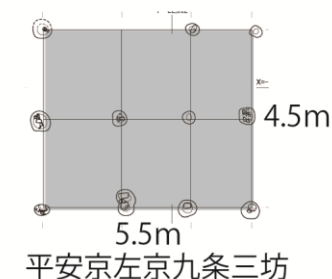
富ノ森城跡



下三栖遺跡



平安京左京九条三坊



平安京左京九条三坊

0 4m

図4 大きな住宅と小さな住宅

5. 屋敷地の様子

住宅の主の姿を想像するには、住宅の大きさも重要な要素ですが、塀や溝で囲われた屋敷地の内部にも注目する必要があります。西京区の南春日町遺跡では、約 15m 四方の範囲に「一般的な住宅」1 棟だけの屋敷が見つっています。伏見区の下三栖遺跡では、塀で囲われた内側に主屋のほかに 2 棟の付属屋と井戸 1 基がある屋敷が見つっています。南北の長さは 28m 以上になります。左京区の吉田泉殿町遺跡では、塀と溝で囲われた一辺 25m 以上ある屋敷の中に、主屋となる「一般的な住宅」のほかに付属屋 1 棟と井戸 2 基が見つっています。住宅建物の大きさでは差がなくても、広い敷地を持ち、複数の建物からなる屋敷地は、相当な財力を持つ階層の宅地といえるでしょう。これらは郊外の農村にあつては有力者の家屋敷であると考えられます。

京内では、左京九条三坊十町の室町小路沿いの状況を見ておきます。13 世紀初頭の状況では、特に屋敷を囲う塀や溝はありません。それぞれ独立した住宅が室町小路に近接して建てられています。家の裏手にそれぞれの家が井戸を有しているようです。住宅の大きさは「一般的な住宅」もありますが、概して小規模です。13 世紀前半の状況では、溝や塀で間口 5～7m 幅で室町小路から奥に向かって宅地が区切られているようです。その中の道路に近い場所に 1～2 棟の小建物が近接して建てられています。井戸はやはり家の裏手にあるようです。宅地の奥に通じると思われる幅 2m 程度の路地と思われる部分もあります。

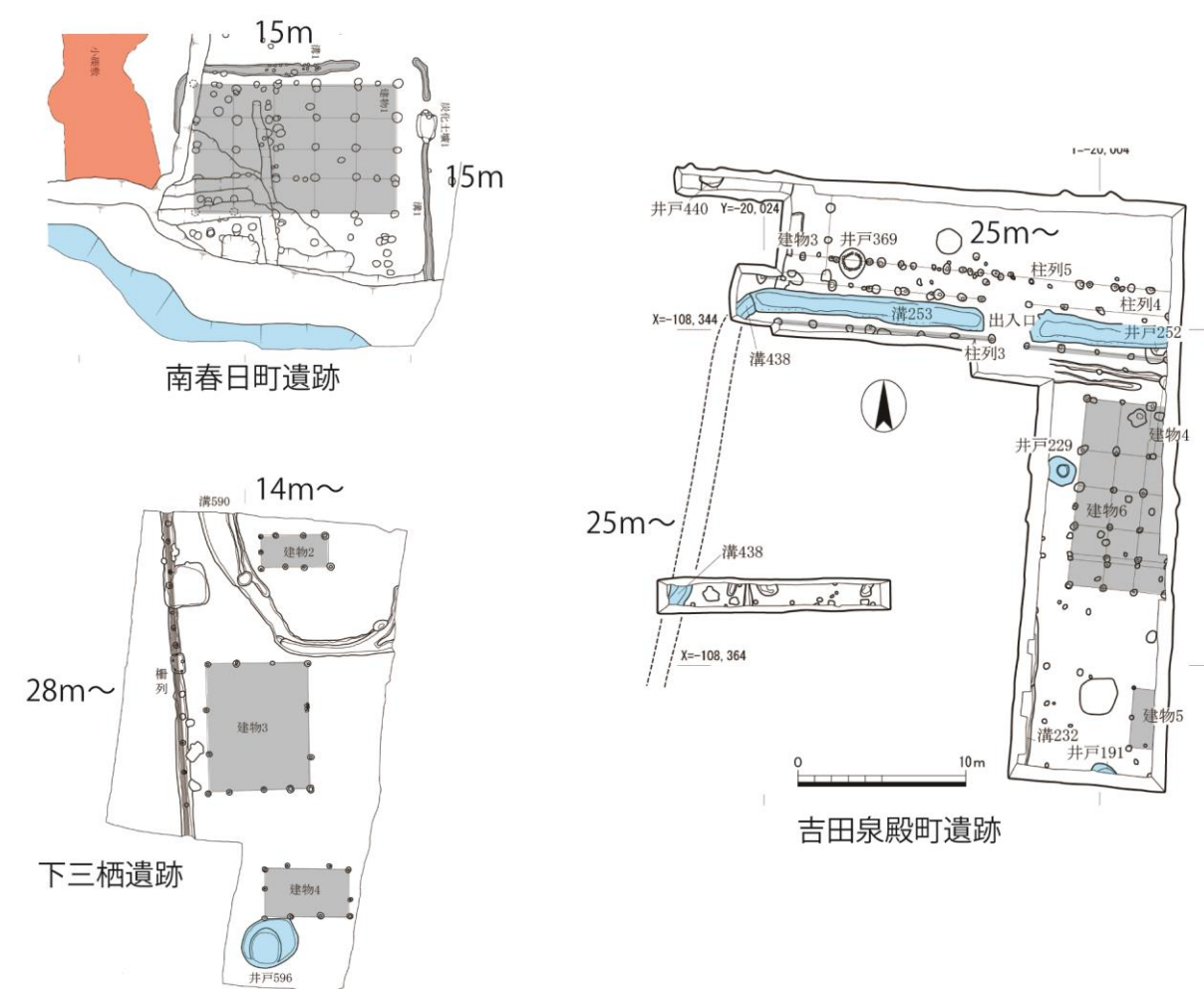


図5 郊外の屋敷地



左京九条三坊十町の宅地の様子（13 世紀初頭）

左京九条三坊十町の宅地の様子（13 世紀前半）

図6 京の屋敷地

6. 板の井戸と石の井戸

人が生きていく上で欠かせないものに水があります。鎌倉時代の人びとにとって、なにはなくとも井戸は必要でした。鎌倉時代の井戸には三つの類型があります。素掘りの井戸と板造りの井戸と石造りの井戸です。井戸とは地面を掘り、地下水を得るものですから、垂直方向に地面に穴を掘ります。地盤が固い場所に井戸を掘る場合はただ穴を掘るだけでいいのです。これが素掘りの井戸です。ところが、井戸の壁面が崩落しそうな場合は土留めを施す必要がありました。井戸は縄文時代にはなく、弥生時代に初めて出現します。弥生時代以降、井戸の土留めはあまねく木材で造られました。ところが鎌倉時代の京都に初めて石で土留めを施す井戸が出現し、板造りの井戸と石造りの井戸が共存する事態が出現しました。

鎌倉時代において石造りの井戸が多く分布するのは京の北半で、南にゆくにしたがいその数は少なくなつてゆきます。南は七条通付近を南限として、それより南にはありません。すべて板の井戸となります。白河にはわずかに石の井戸がありますが、大半は木の井戸です。郊外農村ではほぼすべてが木の井戸です。石の井戸に用いる石材は角がとれた河原の石で、おそらく鴨川の河原で拾ってきたものです。井戸に使われる河原石は長軸の長さが 30 cm 以上あるのが理想的ですが、京に近い場所ではそのような石は出町柳付近より上流に豊富で、下流にゆくにしたがい石が小さくなり、採取が難しくなります。九条付近では長さ 10 cm 程度の石しかありませんし、下鳥羽付近では河原に砂しかありません。近くに手ごろな石があった地域から石の井戸は流行し始めたようです。室町時代になると京・白河の井戸はほぼすべてが石の井戸になります。



図7 石組みの井戸と板組みの井戸

7. 食器の組み合わせ

出土した土器類から鎌倉時代の食器の構成を見てゆきます。これ以外に白木の木製品や漆器の類があったと思われますが、残念ながら地中で朽ちてしまうことが多く実態が分かりません。京内の食器は、肌色素焼きの土師器が主流です。出土した破片の数を数えますと、95%以上が土師器の破片となります。土師器は最も簡単素朴な器で一見貧しい階層の食器と思われるかもしれませんが、神事・法事に伴う飲食・宴会の際などには使い捨てられる性質のもので、新品にして清浄さが求められる器でもあるのです。なので、むしろ大量消費される都市的な器といえるものです。瓦器は焼き上げる時に器の表面に煤を吸着させ真っ黒に仕上げる器で、器表をへら先で磨くなど土師器よりずいぶん丁寧に造られています。枚方市の楠葉付近で作られたものです。平安時代後期から室町時代前半の近畿地方で、広く使用された代表的な器です。こちらは繰り返し使われる器だと思われますが、京内では出土量が大変少ないです。郊外の農村でも土師器が最も多く出土しますが、破片の割合は70%程度にとどまり、20~30%を瓦器が占めます。農村においても土師器が多いのは、やはりこちらでも神事・法事に伴う飲食・宴会の際には、土師器が使用されたことによるのでしょう。これ以外に中国製の白磁や青磁の碗、皿があります。いずれも釉がかかった美しい器で高級品と思われますが、京内だけでなく郊外の農村でも使用されていたようです。

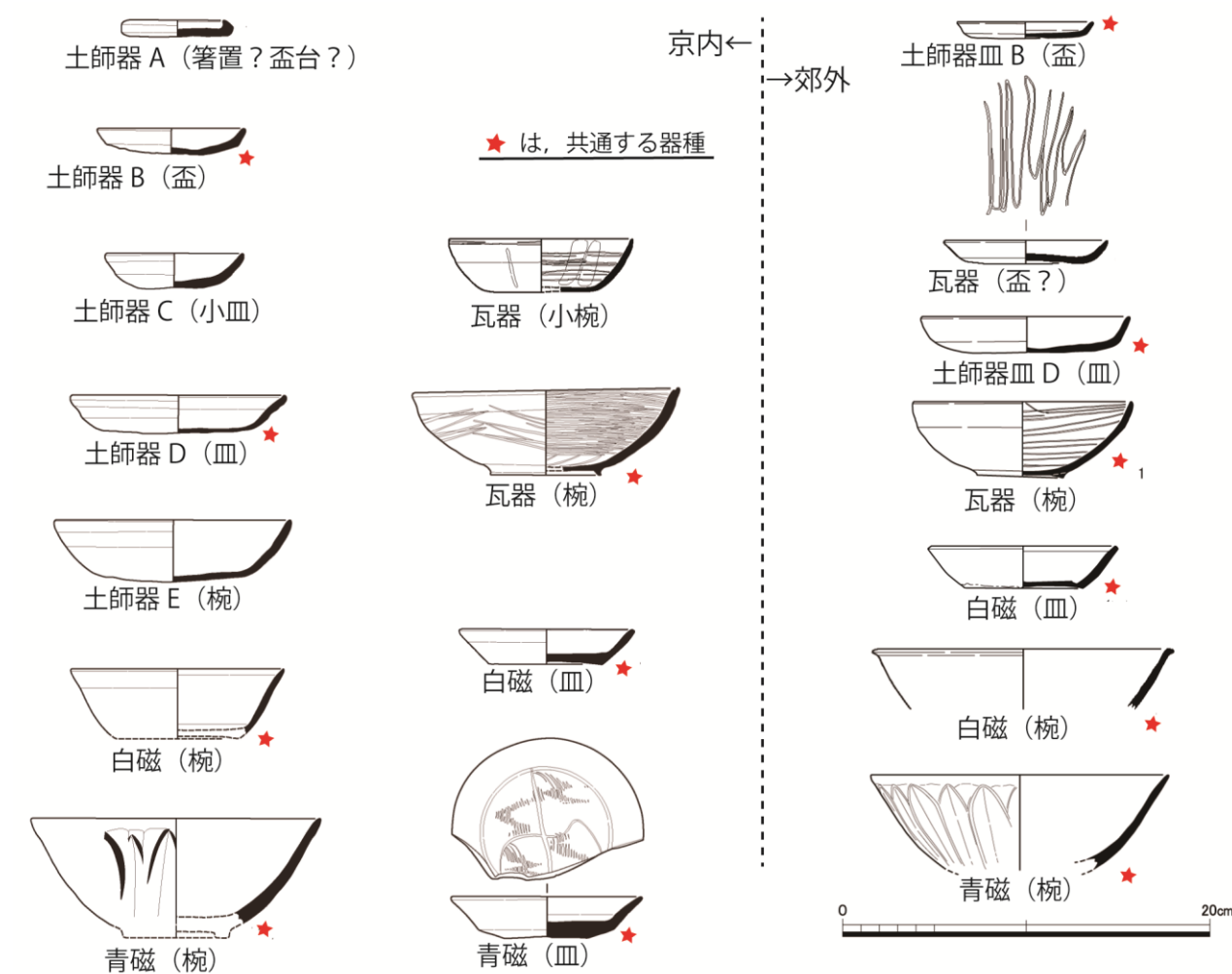


図8 食器の構成

8. 調理道具の組み合わせ

次に調理具を見てまいります。調理具につきましては、京内と郊外農村とで違いがありません。須恵器のこね鉢と瓦器の鍋・釜です。こね鉢は兵庫県産、瓦器の鍋と釜は、瓦器椀同様楠葉産です。鍋と釜は、これ以外に鉄製のものがあつたはずですが、遺跡からはなかなか出土しません。鉄製品は木製品ほど地中で朽ちることはないのですが、使われなくなった鉄の鍋・釜は地金として、別の鉄製品に生まれ変わったのに違いありません。こね鉢は中に食材を入れスリコギなどでこねたり、擂ったりするものです。当時の調理の実態はわかりませんが、出土したこね鉢の内面は、よく使いこまれて滑らかになっています。鎌倉時代には味噌汁が食卓に上がり始めたそうですから、味噌はきっとこのようなこね鉢で擦ったのだと思います。鍋は汁物や煮物をつくる調理具、釜は飯を炊く道具です。鍋や釜を火にかけるにはカマドやイロリが必要ですが、カマドやイロリは先に見たような小さな住宅には備わっていなかったらしく、鉄製の金輪（五徳）の上に鍋釜をのせ、家の土間や屋外で煮炊きをしたようです。鎌倉時代には3本の脚をもった釜が流行しますが、これがあれば金輪は不要です。カマドやイロリがない家で生活する人たちが増えたことの証拠となる出土品です。また、釜の中に口径が15 cmに満たない小型のものが鎌倉時代に出現します。容量的には2合程度しか炊けないもので、明らかに一人用の釜です。小型の釜は、いまのところ京内でしか出土せず、一人で飯を炊き、一人で飯を食う单身都市生活者の増大とそのニーズに応えた商品だったのではないのでしょうか。

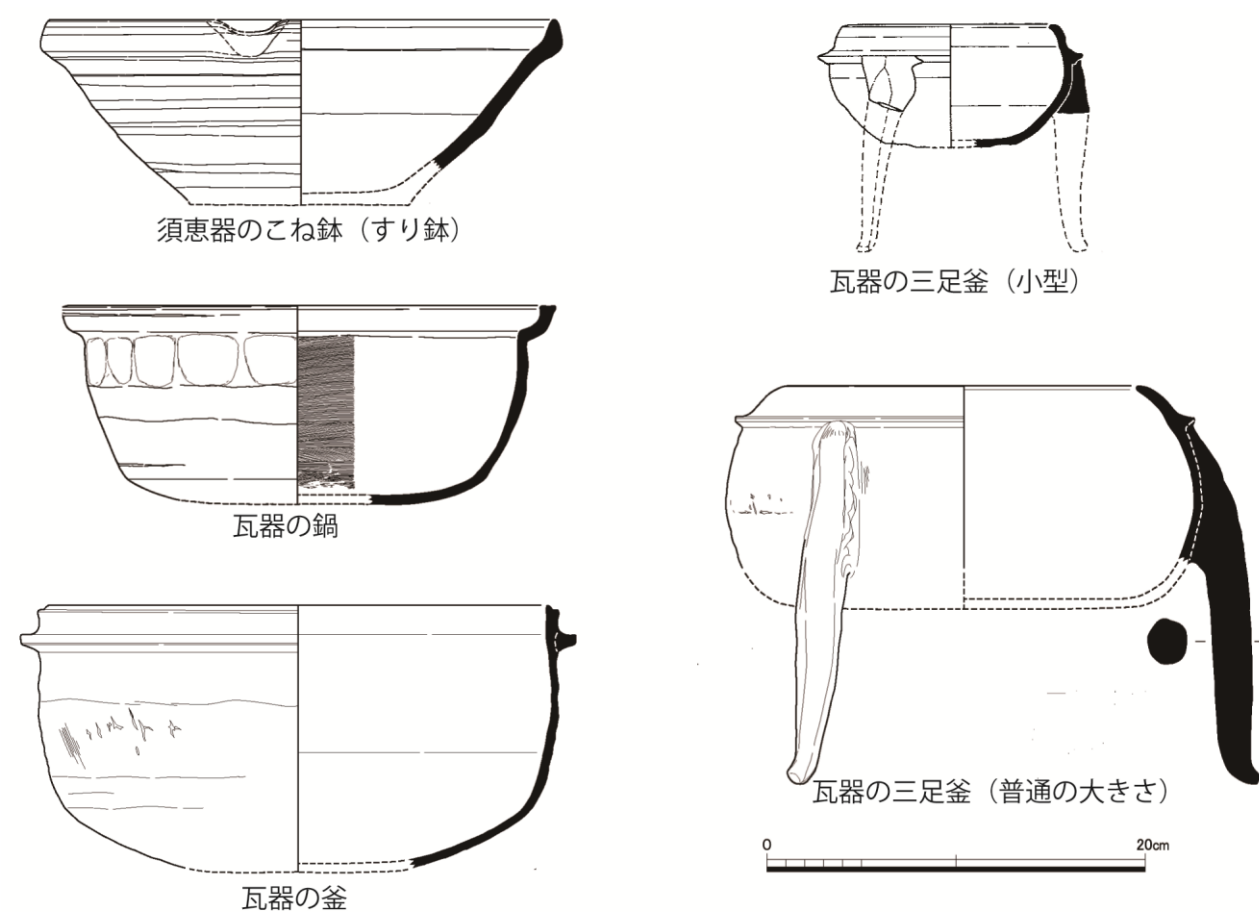


図9 調理具の構成

9. 様々な食材

では、鎌倉時代の京都の人たちは何を食べていたのでしょうか。遺跡からは土器類だけでなく動物の骨や貝殻が出土することがあります。これらから当時の人たちの食生活の一端を知ることができます。京内では鎌倉時代の遺構からマダイ、タイ科、ハモ、スズキ、サバ属、ハタ科、サケ、ブリ属、ナマズ、コイ、アユなどの魚の骨が出土しています。貝では、アカニシ、ハマグリ、シジミ科、ハイガイ、アワビの貝殻が出土しています。これらの食材の調理法まではわかりません。しかし、マダイについては「兜割り」をされた頭の骨が出土していますから、あら煮などの料理に用いられたことが分かります。骨の旨みがすでに利用されていた証拠となるものです。

郊外では、今のところ鎌倉時代の骨や貝の出土例や分析例がありませんので、分からないというのが現状です。文献資料からは、主食は麦や粥、祭礼時に鮭や魚も食したようです。

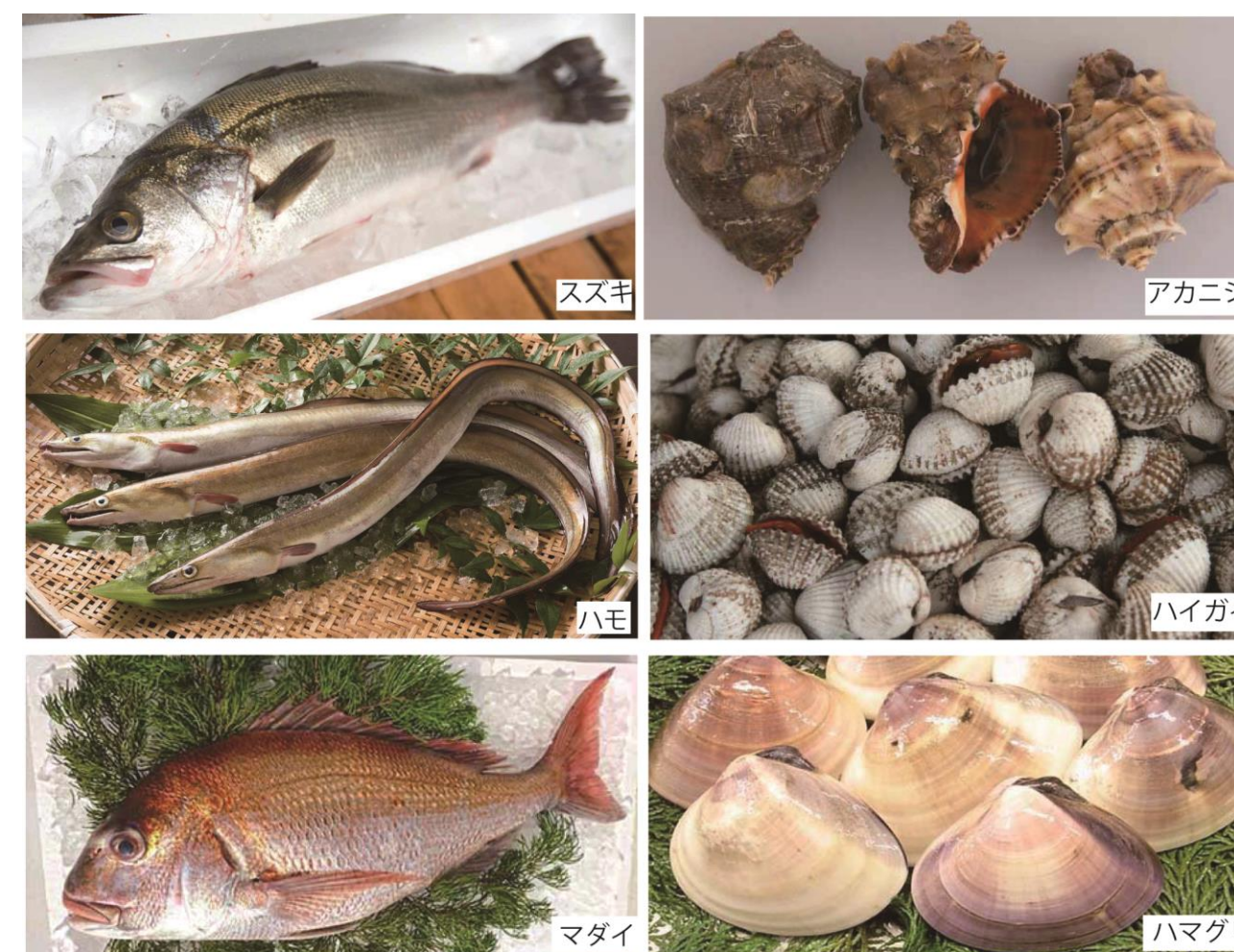


図10 様々な食材

10. 暖かさを求めて－火鉢，石鍋，温石

鎌倉時代の京都の人たちは、どのようにして暖をとったのでしょうか。現代のようにエアコンやストーブはありませんし、分厚いダウンコートもないのです。縄文時代から古墳時代の人たちは堅穴住居内の炉やカマドで調理をするとともに暖をとりました。鎌倉時代においては、住宅内に現在の古民家に見られるようなイロリが設けられていたことが絵画資料などから知ることができますが、床上にある施設なので発掘調査で見つかることはありません。出土遺物から見ると瓦器の火鉢があります。口径が 30～40 cm のやや深い大きな皿形で、小さな脚が三つ付いています。この器は京内で大変多く出土し、郊外農村でも少し出土します。火鉢は個人用の暖房器具といえるもので、炉から離れた場所で暖をとれますし、炉を持たない小さな住宅の住人にも欠かせないものだったと思われます。

調理具とも食器ともとれる器に石鍋があります。九州産です。滑石で作られ釜の形をしていて、器壁が 1～2 cm に及び分厚いです。現在の石鍋料理と同じく、火にかけて調理するのですが、火からおろしても石鍋自体の熱で料理がいつまでも熱いのです。これも京内で多く出土し、郊外農村でも少し出土します。石鍋は瓦器の鍋釜に比べて壊れにくかったと思いますが、壊れた後でもその破片を板状に加工し温石として再利用されました。石鍋素材の保温性を利用し、温石を熱して布などで包み懷に入れてカイロのように暖をとったのです。穴を開けているものが多いので、ここに紐を通し首からかけるなどしたのでしょうか。

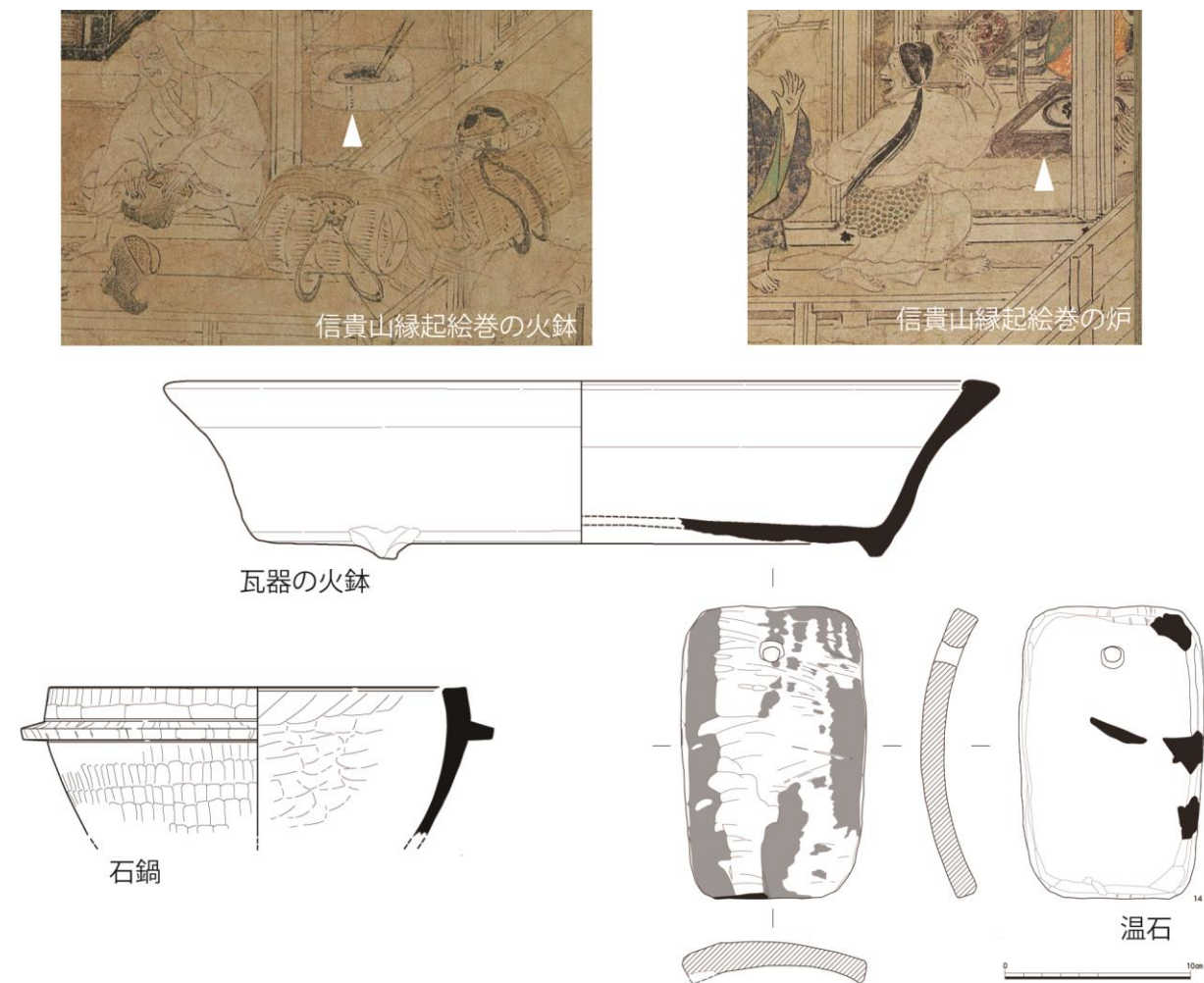


図 11 火鉢，石鍋，温石

おわりに

鎌倉時代の家、建物、井戸、食器、調理具などについてご紹介してまいりました。この時代は庶民生活に大きな変化が生まれました。多くの人たちが床上での生活を始めたようですし、小さな住宅が数多く出現した一方、庶民の家はいささか大きくなりました。京内、農村を問わず宴会がよく行われました。都市の小住宅に住む核家族や単身生活者に便利な小型の釜や火鉢が数多く流通もしました。庶民の生活は平安時代より少し便利になり、生活における自由も少し増したようです。

参考文献（主なもの）

【発掘調査報告書】

- ・内田好昭「京都大学構内遺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『平成 8 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1998 年，69～74 頁。※吉田泉殿町遺跡
- ・加納敬二ほか「南春日町遺跡第 22～24 次調査」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『平成 3 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1995 年，82～84 頁。
- ・加納敬二ほか「下三栖遺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『平成 11 年度京都市埋蔵文化財調査概要』2002 年，103～108 頁。
- ・小檜山一良ほか『平安京左京九条三坊十町・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013－15，2015 年。
- ・鈴木廣司ほか「久我東町遺跡」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『昭和 59 年度京都市埋蔵文化財調査概要』1987 年，82～87 頁。
- ・鈴木康高ほか『平安京左京九条三坊八町・烏丸町遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017－8，2018 年。
- ・中谷正和ほか『富ノ森城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2020－6，2021 年。
- ・丸山真史「出土した動物遺存体」網伸也ほか『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008－10，2008 年，78～79 頁。
- ・丸山真史「出土した動物遺存体」東洋一ほか『平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013－2，2013 年，63～65 頁。

【単行本・論文】

- ・小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房，2005 年。
- ・中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社，1995 年。
- ・中井淳史『中世かわらけ物語 もっとも身近な日用品の考古学』歴史文化ライブラリー540，吉川弘文館，2022 年。
- ・原田信夫「中世村落における食生活の様相」芳賀登ほか監修『食生活と食物史』全集日本の食文化 第 2 巻，109～135 頁。初出は『飲食史林』4，1980 年。
- ・宮本長二郎「日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間－関口欣也先生退官記念論文集』中央公論美術出版，1999 年，3～23 頁。

【絵画史料】

- ・小松茂美編『信貴山縁起』日本の絵巻 4，中央公論社，1987 年。